6　中国古代人体内景図に於ける脂腰、脂膜について

高島文一

一　はじめに

一七七一年杉田玄白は、解剖（腑分け）を行い、オランダの解剖書ターヘルアナトミヤと対照してその正確さに感嘆した。殊に膵臓が大機里爾（大キリール）と名前で記載されており、中国古来の五臓六腑説では存在しなかった臓器であることから、オランダ医学の優越性を確認した。これに対して、三谷公器は一八一三年解体発蒙を著し、大機里爾に相当するものは中焦腑であって、膵を見落していたものでないことを強調した。私は人体内景図に胃の上部に脂腰又は脂膜と描かれた部分が、膵臓に相当するものではないかと考察するので、以下それについて論ずるものである。

二　中国近世までの解剖蔵府図

新の王莽が、一六年王孫慶を解剖したが、その図は散佚している。八四八年、唐の女道士、太白山見素女胡愔が五蔵六府図をつくった。これは現存する中国最古の臓腑図であるが、道教の立場から、五蔵を天の五気と地の五味が結ばれたものとして説いている。そして蔵神、玉女、童子を配するので、解剖学的正確さを期したものではない。一〇四五年、欧希範らを宜州で解剖した呉簡が図を描かしめたが、かなり正確である。続いて一一一三年、楊介は、泗州で賊が刑戮された時、欧希範五臓図を補正する目的で解剖し、存眞環中図をつくった。この事は郡斉諸書後志巻二や僧幻雲の史記標注に記載されている。しかし図そのものは明末以後散佚している。幻雲の史記標注の存真図の説明の中に、「其中黄漫者脂」という一文がある。黄色の脂のようなものが、つながっているということであるが、これが脂腰の唯一の説明とも受けとめることができる。

一一七四年陳言の三因極一病証方論に三焦に脂膜有りと記載されている。一二三四年王好古の医家大法の解剖図には脂腰は書かれていない。宋代の華佗内照図に脂腰

の描かれたのがある。一三〇三年梶原性全の著した頓医抄巻四十四に存心環中図から写した脂膜と胃と脾の図がでてくる。その後の解剖図で脂膜の書かれたものは、一五七五年の李梴の医学入門がある。古今図書集成医部全録には脂膜として描かれている。一六二四年、張介賓の類経図翼、一六三七年、李士材の医宗必読、一六六六年、同じ李士材が序文を書いた本草滙には脂膜としてでている。明の呉文炳の『神医秘訣遵経奥旨鍼灸大成』には脂膜図があり、岡本一抱の鍼灸抜筆大成にこの図が引用されている。一六六九年、山本玄通の鍼灸枢要、一六八六年岩田利斎の鍼灸要法には脂膜、一六九七年林玄原の十四経指南には脂膜図がある。何れも引用と考えられる。

三　膵臓の認識

杉田玄白が大機里爾と訳したパンクレアス（パンはあつまるクレアスは肉）は肉、腺、濾胞の集まったものという意味で膵の字を造り医範提綱に発表した。大槻玄沢は重訂解体新書に肫という字を当てた。英国人ホブソン（合信）は一八五一年全体新論を書き甜肉と命名した。解剖の位置からすると胃の上部からのぞきこむようにするとパンクレアスが見える。一八三〇年王清任は医林改錯を書き総提と命名した。池田冬蔵、小森桃塢は一八二二年解蔵図譜を著し叢胞と命名した。一九八三年刊のグラント解剖書にも胃の上にパンクレアスが現れた図がある。従って胃の上にある脂膜とは脂のような肉、腺、濾胞のようなものが集まっているものと解することができる。

四　むすび

存眞環中図は一一一三年、楊介により観察記載されたが、正確な解剖図と言える。これ以後、一八三〇年の王清任の解剖図まで、殆ど進歩は見られなかった。

その後散佚し、一三〇三年、梶原性全の頓医抄巻四十四に引用され、胃の上部に脂膜という臓器を認めることができる。その後李梴の医学入門、李士材の医宗必読、呉文炳の鍼灸大成、張介賓の類経図翼華佗内照図、林玄原の十四経指南に引用されている、医学入門の医部全録、本草滙、山本玄通の鍼灸枢要、岩田利斎の鍼灸要法には脂膜と書かれている。パンクレアスを脂膜、脂膜として認識したものと考えられる。

（京都市・高島診療所）